

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 秋成と幻妖の文学

doi:10.29714/TKJJ.200106.0003

淡江日本論叢, (10), 2001

作者/Author：蕭碧盞

頁數/Page： 51-74

出版日期/Publication Date：2001/06

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200106.0003>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



【論文要旨】

本稿は秋成研究の一環として、主に幻妖の文学を述べたものである。

秋成の人となりとその生い立ちのために、世の中に相入れぬ性格もあって、日本物語史上に特異な、そしてすぐれた物語を刊行していった。秋成の人生遍歴を、時代を通して考察し、『雨月物語』に見られる幻妖文学の世界がどのように描かれていったのかを考えていくことにする。

この小論では秋成の『雨月物語』に描かれている人物像を通して、秋成の時代性を通してどのように幻妖の世界を描き出していったかという過程を思考していくことにする。

夢幻、怪異の世界が虚構なものであるとしながらも癩症病みの秋成は、現実からふと非現実なものへと入眠幻覚におちいる。これらの癩性のわずらいから来る宿命的な身体コンプレックスは、終生の怪異的文学への要素となっている。

キーワード：幻妖 直き心 浮世草紙 怪異小説 中国白話小説 翻案小説 入眠幻覚
調伏 捨象

本稿は秋成研究の一環として、主に幻妖の文学、一、幻妖の人物像、二、幻妖の世界を述べたものである。

秋成が生まれた享保19年（1734年）より、文化6年（1809年）に死去したその間の時代を考証してみると、その社会背景によって秋成の人生、生活がどのように影響されていったのかを知ることができる。

秋成の人となりとその生い立ちを、各方面から考え合わせると、生涯を隠者的に振舞い、その人生に背を向けて過ごした事は、自他共に認める事である。

まず、出生より歿するまでの、必ずしも幸せではなかった日々を追って行き、それがために、世の中になかなか相入れぬ性格もあって、日本物語史上、特異な、そしてすぐれた物語を次々と刊行していった。「文は人なり」といわれる。この秋成の性格上の特異性或いは非社会性は必ず秋成の作品に大きな影を残すことは理解に難くない。従ってこの視点に立って秋成の物語を眺める時、そこには現実の社会現象と幽冥界を異にする不思議な物語が虚々実々と繰り広げられ、読者を魅了してやまない何ものかが潜んでいるのである（注1）。

まず秋成の特異な物語の発想から、どのように自身の作風を形成していったかを辿って行って、秋成の人となりや、人生遍歴をもう一度、時代を通して考察し、時代考証の中で、『雨月物語』に見られる幻妖文学の世界がどのように描かれていったのかを考えて行くことにする（注2）。このためには秋成の『雨月物語』に描かれている人物像を通して、秋成の時代性を通して、どのように幻妖の世界を描き出して行ったかと云う過程を視野に入れて思考する。

一、幻妖の人物像

秋成は幼い時（5歳）より痘瘰を患い、一命を落すやも知れぬ重病より、養父母の手篤い看病と加嶋明神の加護により危地を脱する事が出来たので、神を信仰する事は他の人よりも篤かった。

身体的には天然痘の後遺症で、指は萎縮してしまい、両手の中指は発育不全で小指くらいしかなかったという。そのため、成人してからも、鉾を折られた蟹に似ていることから「剪枝崎人」と自嘲している。

ainiti
翁五歳の時、痘療のつよくして、右の中指短かき事、第五指の如し、又左の第二指も短所にて用に足たざれば、筆とりては右の中指なきに同じく、筆力なき事患ふべし。

胆大小心録（八九條）（注3）

と、我が身の不健全さを書き、また

有蟹翁石者。形不醜已、心亦醜也。以横行為直、雖眼高腹大、性噪而、眈々志變。二整八腕之剛、不以人恐。口吃常涎沫流、言語不分、以螯為筆、好理論辨説。人不必用其言（中略）「人云美我見之醜。美醜不相分、則又無有善惡邪正矣」。甲堅螯振、遂爪折、身為廢物。於是愈逡巡、守獨幽身（注4）。

このように癒える事のない我が身の不幸を思い巡らす時、精神状態も不安定となり、肉体的、精神的にも疲労していたであろう。自分から蟹という異名を好んでつけ、生来文学的素養もあったがため、自からを世に対してすね者として過し、自分の殻に閉じこもって、なかなか世の中の人との心の交わりをすることなく、遊蕩の中に身をおいたと思われる。しかし養父母の必死の看護で一命をとりとめたことは、何にも増して、秋成のやさしさ、そして直き心を植えつけていったが、身体的なコンプレックスをなかなか払拭することが出来ず、病の後遺症もあって癩癩もちになっていた。

そして、世をすねてのら者などと遊び歩いてはいたものの、生来の学問、文芸好きはだんだんと心の中に深く養われていったと思われる。

父の奨めで学問に目を向けてからの秋成は、内向的な性格に加えて、人間性に深く関わっていく自意識が働き、世の中を常に「あだごと」と見て、浮世草紙『諸道聴耳世間猿』（明和三年・1766年）『世間妾形氣』（明和四年・1767年）を刊行した。それにより、今まで気乗りのしなかった文学に対する気持ちが加速度的に加わって、後の読本を次々と発表して世に問うこととなった。

当時の江戸時代には中国白話小説も日本に伝わって来て、中国の怪異小説の翻案物も早くから上梓されていた。

生涯の師となる加藤宇万伎に出会ってからは、国学にも医学にも力を注ぎ、今までののら者時代を改め、生活を建て直していった。ここで秋成の言うのら者とは、放蕩無頼の食

いつめものの事ではなく、裕福な家の者でも、その時代の社会に反抗する若者たちの事であった。『世間妾形気』の序文に、

荒れにし我軒はいつしか浮浪子の中宿になりて、長き代のかたみにはあらで、荒唐世説をいはざれば、夜食の腹ふくるよと、宵よりつどひて七つの鐘聞く夜は数多たび

秋成の描いていく怪異・幻妖の恐怖感は、反社会的な浮浪子もの思想を世の中の食いつめた者として扱った浮浪子ではなく、秋成流のインテリの反社会性を示す一つの小説の姿勢として描かれている（注5）。

このようなのら者としての友と袂を分かち、国学や医学を研鑽したことは、本質的に「直き心」「まことの心」を持っていた秋成の本質を思い出すことができる。それゆえに浮世草紙に出てくるような、現世的な時代世相とそれに伴う脱現世的な神仏の世界が出来し、その中に仏道に説く六道輪廻の思想や因果論をも含めた示唆・教訓を含めた物語がこの『兩月物語』などに現れ、それが秋成の幻妖文学を作り上げてゆく（注6）。

都賀庭鐘作の『英草紙』に刺激され、また自身の宿命的な痘療による病の後遺症で、身体の不自由さと、感受性の強い芸術的な靈感で、次第に現世を偏屈で隠者的な考えで見るとようになってきた。

そうした秋成ではあっても、社会の動きを敏感にとらえつつも、太平の世の中で生まれた幸せを痛感しつつ、時の経過とともに終生の師や友を失い次第に今までとは違った人材の乏しくなっていく世相を人一倍敏感に悟ったものと思われる。それは畢竟、世の中の衰えであるということ自ら体験していくことである。

詩人の書生涌けどもども傑出なし。ないはずなり。師の半徳をさへ得かねる事ぞ。
その師の徳が又さきの師の半徳なるべし。なんでも段々おとる事じゃしらぬ（注7）。

その原因となるものは、我が身の道売り物にし、自己を顯示しようとする者の多く輩出する時代を嫌い、半隠者的な生活に自らを閉じ込めた。それ故、彼は自己を顯示する事なく、時代に背を向け、風流の道に身をゆだねる事になる。実家が火事で焼失したり、医業につまずいたり、そして良い師友に恵まれながらも彼の反俗精神は一生揺らぐことはな

airiti
かった。

今世名利の人は、太平の煩はず也。芸技諸道さかんにして涌くが如し。是亦治園の塵芥也（注8）。

と、学問や文芸を秋成なりに考えていたと思われる。

若い頃に浮世草紙などを物して「あだ心」などを描いた後は、加藤宇万伎と言う師を得て、日本国学に興味を示し始めた。そして当世の文芸諸風潮の中で、世の中には絵草紙類が氾濫し、それが「見る本」より文章を味わう「読む本」に推移する傾向にあり、更に中国文学からの影響で、中国白話文学が翻案伝承され、秋成はついに日本国学から格調高い小説を織り込み、それが一種の幻影となって彼の心に深く刻まれて行ったと思われる。

彼の不幸な生い立ちや痘瘰による重なる肉体的不幸の意識は、怪異なものたちに愛を与え、ロマンチックな彼の心に憐みを植え付けていったのであろう。こうした思想が、「あだし心」から「直き心」につながって、後の『雨月物語』や『春雨物語』の出版につながっていったのである。

肉体的、精神的にも苦しんでいた秋成は、当時世間に流行していた翻案小説に刺激され、幻妖・怪異小説を書いたが、その初期の特徴として、作品に一貫している流れの中で、その前提として、雨、月、雲、夜、血を取り入れ、空中浮遊や飛翔のような自然界を自由に飛び回ってみたいという考えを持ち、自からも、早くから狐狸の怪を信じていたと思われる事柄が『胆大小心録』などの中で各所に見える。狐についての記述としては、下女が狐狂いをした事を述べている。

播の何の里にては、婢女午飯の時、田所にひぢりことまみれし足をすます。すまし終りて、盥を垣ねにすてんとするに、狐ここに臥したるをしらず、湯きつねにそそぎかけたり。狐おどろき去る時、一たびかへり見て婢女が面を見る。婢女しらず。其夜婢女口ばしりて云。「我ひるいしたり。何の為にか、すすぎし不浄の水を我にそそぐ」と、いかりにらみて徹夜狂ふ事恐し（注9）。

また、自分にふりかかった事として、

細合半齋は性慇懃にて、礼儀正しき也。世人是をかへりてうとむは、世人の性亂墮なる者也。京師に在りて西本願寺へ拝走す。あした三条油の小路を出でて、昼過ぐるに到らず。ついに日くれしかば、慌忙として宿にかへりし事あり。是、性のしづかなるをさへ、狐狸道を失なはず。

翁亦一日鴨づつみの庵を出でて、銀閣寺前の浄土院にゆくに、吉田の丘の北をめぐりて又東にゆく順路也。道もつとも狭からず。さるにいかにして白川の里に来たりぬ。物思いてまどいしと心得て、やうやう東南の浄土寺村に来たりて、和上圖南と談話のついでに、此事をかたる。和上、「病なるべし。よくつつしみたまへ」とぞ。歸路又よし田の丘の北に来て、大道につきて西に庵にかへらんとす。いかにして百萬べんの寺前にいたる。ここにてしる。狐道をうしなはせしよと。しかれども心茫然たらずして午後かへりつきぬ。又一日北野の神にまうづ。あしたに出でて拝し、東をさすに、春雨蕭々とふり来たりて、老の足よわく、眼又くらき煩ひ、大賀伊賀をとむらいて、午飯を食しぬ。雨いよいよのりて、頭さし出づべからず。「今夜ここに宿す敷、さらずは乗輿をめさん」といふほど雨少しやむ。庵には十二三丁の所なり。つねにかよい馴れて労なく思へば「雨をもしろ」とて門を出でて東をさす。一条ほり川にいたりて雨又しきり也。傘を雨にかたふけて行く行くくるし。しかれども行く行く、大道のみにて迷ふべからず。雨に興じてくるほどに、ほり川のさわら木丁にいたりぬ。ここに始めて心づきて、笠のかたぶきに東南をたがえしやおもひ、又東をさすに、はからずしも堀川の西にあゆむあゆむ。又所をしりたれば、いかにしてとて、心をすまして、ついに丸太町をた判に東をさして、庵にかへりぬ。日正にくれんとす。(中略) 是亦きつねの道うしなはせしか。半齋も我も性神たがわずして、一日をわする事、狐が術の大のこへたる所也(注10)。

と書きしるし、自からもきつねの術中におちた事を述べている。『胆大小心録』は秋成生涯の総決算とも言うべきもので、その中にはこうした秋成自身の奇異な体験をした記述が度々書かれている。

大場俊助氏はこのような現象を人眠幻覚と言っている。現実であるのか現実でないのか、夢か現かの境目をはっきり見極める事ができずに、ふと気が付くと幻覚から目ざめてしまう。これが出眠幻覚であり、その中で幻妖、怪異の世界を見てしまうのであると説いている。また(注11)

樵あり、母一人、男子二人、女子一人ともに親に仕へて孝養足る。一日村中の古き林の木を切り来る。翌日兄狂を發して母を斧にて打ち殺す。弟亦これを快しとして段々にす。女子も又粗板ささげ、庖丁をもて細かに刻む。血一雫も見ず。(胆大小心録三二)

とあり、樹木同様に母からは血の一雫もでなかったという奇怪な話が載っている。これも樹の霊による祟りか、それとも子供が母の血を飲んでしまったのか、いずれにしても、血の一雫もしたたらないという奇怪な話として彼は記述している。

秋成は神や怪異物や動物には本質的な相違は認めてはいない。しかしそれは人間が造った神、仏ではなく、自然神であって、自然神は、人間が善く対すればよく愛し、よく仕えなければ崇ると言っている。神は動物霊に近い性格であると言い、奇怪な事もそうした観点からおこるものだと述べている。

神は神にして人の修し得て神となるにあらず。易云ふ「陰陽不測謂之神」。はかるべからずの事明らか也。さればこそ人の善悪邪正の論談なき歟。我によくつかふる者にはよく愛す。我におろそげなれば罰す。狐狸に同じきに似たり。

(胆大小心録三〇)

と説いており、きつねやたぬきの事なども儒者と比較して自然神と同じであると言っている。小心録(一三)にはまた

儒者と云ふ人も又一癖なりて、「妖怪はなき事也」とて翁が幽霊物がたりを、終りに後に恥かしめられし也。「狐つきも癩症がさまざまに問答して、「おれはどこのきつねじゃ」と云ふのじゃ。人につく事があらふものか」といはれたり。是は道に泥みて、心得たがひ也。狐も狸も人につく事、見る見る多し。又きつねで何でも、人にまさるは渠が天稟也。

と述べている。

秋成は倫理的規範性は人間のものであって、他の生物には通用しないし、加害と被

害の意識も人間と他の生き物では異なる。人間は社会的関係性に生き、狐狸は社会の関係性を捨象したところに存在して生命の始源的存在である(注 12)。

と森山重雄氏は説いている。こうした理念は『雨月物語』全篇にも一貫した潜在意識として印されている。

二、幻妖の世界

秋成の小説の代表作である『雨月物語』の中には、秋成の小説に対する考え方が如実に表れている。

『雨月物語』を見ると、死して幽界に行った人が、生前の怨みが晴らしたくて、現世に幻となって現れ、自分の立場や思いを訴えようとする。それが怪異、幻妖となって物語を構成し、怪異小説としてすぐれた描き方をしている。

当時の怪異小説の中でももっとも完成度の高いと称されている『雨月物語』の各篇を見ると、前節にも記述したように、中国白話小説の影響もあり、秋成の怪異的、幻妖的寓意翻案されたものも多く見られる。

巻一の「白峰」は、崇徳院の怨霊を通して異質な別次元の閉じ込められた世界を描き出している。その典拠とする処は、日本の古典である。その古典とは

『山家集』(1180年頃西行法師歌集)。

『撰集抄』(1180-90年頃撰者は西行法師とも言われているが疑わしい)。

等を参考にしたと思われる。

『白峰』における王位継承により端を発した崇徳院の怨念は、それが大魔王となられた恐ろしい姿を、西行法師の口を借りて御霊を静めようとする語りがあ

松浦清山の『甲子夜話』(江戸後期に刊行された)続篇巻の四の二に

讃州白峰の陵(崇徳帝)は山上にあり。昔時は度々鳴動せしが、西行がここに詣でて和歌を詠ぜしより、鳴動少なくなりしと云伝ふ。されば西行の外、今に至てこの陵に往く者なし。然るに先の高松侯、この処に往んと云はれしを、老臣等より左右の者迄、前前よりここに至れば必ず凶変ありとて、遮て止めしが、侯聞きいれず強て山上に赴かれしを諸臣これを憂へ、皆登城して侯の安否を窺みしが、彼処に到んと思ふ頃、遥望すれば山上に黒雲覆ひ震動開ゆ。……雷雨車軸を流し、山上の鳴

動おびたく、下山畢れば復天晴けるとぞ（注13）。

このように、年が経っても崇徳院の幻想が濃く伝わっていた所に秋成が崇徳院を題材として選んだ理由が存在するのではなかろうか。

「白峰」は崇徳院の怨念の深い事を実感させ、本文中にも随所にその無念さを表わそうとしている描写を見ることが出来る。

松柏は奥ふかく茂りあひて、青雲の輕靡日すら小雨そぼふるごとし。千仞の谷底より雲霧おいのぼれば咫をも修悞ここ地せらる。

魔王となって出現する崇徳院のいかにも恐ろしい靈的な空間を描き出すために、湿気、雨などを媒体として、その場面を予感させている。また

時に峯谷ゆすり動きて、凡叢林を僵すがごとく、沙石を空に巻上ぐる。見る見る一段の陰は君が膝の下より燃え上りて、山も谷も昼のごとくあきらかなり。

などのように、崇徳院が復讐に燃え、怨念そのものの大魔王になっていく時間的な経緯を感じさせるのである。

朱をそそぎたる竜顔に、荆の髮膝にかかるまで乱れ、白眼を吊り上げ、熱き嘘をくるしげにつがせたま玉ふ。手足の爪は獣のごとく生のびてさながら魔王の形あさましくもおそろし。

このような光景を眠っている意識ではなく、目をつむっていた時に、声のした方に目をあけるとそこに院の姿を見たという醒めた意識から書かれたもので、これらは、自分の感じた世界が目の当たりの光景として感じられる夢幻の幻想の表現として描かれている。

西行法師との歴史を動かすような言葉と言葉との論戦、その言葉が尽きた時の恐ろしいまでの院の天上靈界に及ぶ怨念のはげしい怨靈思想が作品の中心となっているので、恐ろしい作品となっている。西行法師はその怨念のはげしさに涙をし、

「君かくまで魔界の悪業につながれて、仏土に億万里を隔玉へばふたたびいはじ」と沈黙してしまった（注 14）。

この沈黙と静止ののち、西行は、ふたたび

よしや君 昔の玉の床とても
カゝらんのちは何にかはせん
「刹利も須陀もかわらぬものを」

と諫めると、院は心を静められて、魔王の姿も化鳥もかき消すようになる。その時の状況を

十日あまりの月は峯にかくれて、木のくれやみのあやなきに夢路にやすらふか如し

と描写している。あやなきとは、西行が入眠幻覚になった時

月は出でしがど、茂きが林は影をもらさねば、あやなき闇にうらぶれて、眠るともなきに

と書いているのを受けての出眠幻覚を表すことばである（注 15）。

院の霊との対話は、時間的にも、夜から朝にかけての夢幻ではなく、曖昧化して入眠から出眠までを形象化したのであって、月、闇、茂みは自然的な暗示である。

西行法師の心の中に、魔王としての院の怨念が移入されたため、恐ろしい幻妖を見るに至ったのであろう。

次の「浅茅が宿」は、物心ついてからも物事にこだわらない夫が、農業を嫌ったので、家が貧しくなり、都へ絹を売りに出発したが、約束の秋になっても帰らず、とうとう七年も経ってしまい、ようやく家に帰れることになったが、その間に世の中が騒がしくなり、戦がおこり、

身のうさは人しも告じあふ坂の

夕づけ鳥よ秋も暮れぬと

とひたすら夫を待っていた宮木は、長引く戦でいつしか貯えがなくなり家に閉じこもってしまった。

一方勝四郎も早く家に帰りたいと思いながら、戦に巻き込まれたり、病気になったり、月日をいたずらに重ねていった。世の荒廃と同じような自分のうらぶれた姿を請けなく、家に残した妻を思いやり、たとえこの世にいなくなっていたとしても、せめて塚でも建てるべきだと、思い立って帰宅の途についた。(その時丁度、五月雨の晴れ間であり、『雨月物語』の設定の時間として書き進んでいく。)夜となり、日は暮れ、雨雲は低く垂れ込め、今にも雨が降って来るのではないかと思われ、あたりを見回したが、家の所在が分からなかったが、雷に摧かれた松のすき間から、雲間の一瞬の星の光で住み慣れたわが家の門が見つかり、喜んで咳払いすると、老いた妻の声が聞こえた、再会できたことを喜び、今までの苦労話を繰り返し語り、妻は

銀河秋を告ぐれども君は帰り給はず、冬を待ち、春を迎えても消息なし。今は京にのぼりて尋ねまいらせんと思ひしかど (中略) 今は長き恨みもはればれとなりぬる事の喜しく侍り。逢を待間に恋ひ死なんは人しらぬ恨みなるべし。

と、さめざめと泣き、夏の短か夜を一つ床に入って過した。しかし、夜明けの寒さに目が醒めると、そこには朽ち果てたわが家しかなく、有明の月もしらじらとして狐狸の住居となっていた。昨夜再会した妻はすでにこの世の人ではなく、怪しい精霊に化されたか、それとも妻の亡霊の懐かしさのあまり、あの世から帰ってきたのかと思ひ嘆いて、大いに泣きわめいた。日は高く昇って『雨月物語』の幻妖の時は去って行く。

近くに住む翁より宮木は烈婦であつて、思う人と約束した言葉を守って、家に閉じこもり、とうとう一人となって、夫に心を残して死んで行ったと聞かされ、心うたれたものであった。翁は「今あなたの物語をお聞きして、宮木の烈婦の魂があの世から来て、あなたに恨み言を申し上げたに違いないと思いますから、もう一度、法名をつけてもらったりして、心から弔ってお祈りしなさい。」

と暮の前へ行き、声をあげて嘆き悲しんで、夜通し念仏を唱え

いにしへの真間の手児奈をかくばかり

恋てしあらん真間のでこなを

の歌を詠んだ。ここには烈婦という貞淑な女性が、物にかかわらない軽薄な夫を待ちこがれたという説話的な物語として書かれている（注16）。

巻二の「夢応の鯉魚」は興義という憎が僧でありながら、画人としても世に認められていたが、画題は、普通の人が描く仏像や山水、花鳥ではなく、寺の仕事の合間に湖に行っては魚の遊泳する様子をよく観察していたので、魚の画は世の人によく知られるようになった。雑念を去って絵心に集中するといつしか自分も魚となって一緒にたわむれて遊ぶ入眠幻覚におちいり、また醒めると遊躍する姿を書いて眺めて、決して人にゆずることはなかった。

自然界に自由を求め、現実からの解放を願望していた興義は、夢ともうつとも分からぬうちに、うとうとして入眠幻覚に陥っていったその現象と秋成の考えていることを重ね合わせた物語となって表れている。

「夢応の鯉魚」は、中国白話物語の『古今説海』の「魚服記」よりの截案であることは世に広く知られているところである。中国の「魚服記」には

「魚服」とは、おそらく入眠幻覚と出眠幻覚の間を支える玉手箱の様なものであろう。こうした鯉魚幻覚に憑かれた絵師たちが現実に存在していた。『浪速人傑伝』（続燕石十種第一）に鯉翁として伝えられた蛇玉葛子明があり、また建部綾足の門人の画人として鯉の魚彦と謳われた指取魚彦がいる（注17）。

とあり、これを物語化して一篇にまとめたと思われる。

秋成は自己の遊泳したい願望を僧の興義に人魂して、いかに魚として自由に湖中の楽園を泳いでまわって楽しかったかを興義の言葉で語っている。

僧興義は僧としての務めに飽き、網に取られた魚を買い取って湖に放しては、その喜んで泳ぐ姿を観察したりしていたので、魚のことについては他人よりくわしく思えるようになり、また愛情も湧き出たのではないかと思う。

その興義が病にかかって寝込んでしまい、三日間も仮死状態となっていた。肉体は仮死しているのに、精神は興義自身が鯉魚となって湖中を遊泳して楽しかったことなどを夢見るようになる。いかにも日頃思っていたように自由に湖の中を遊び、魚にならなければ得られぬ楽しみを味わっていたのであろう。泳ぐうちにひもじさを覚えて、釣人のえさにつ

られて、釣り上げられ、外観の鯉魚として切られなければならなかった。人間としての肉体は仮死して魚に変身していたので、人間の言葉を持たない存在となっていた興義は、釣り糸で捕らわれてから、自分は仏弟子と言っても伝わらない。人間であることも分かっただけでもらわぬもどかしさに焦燥し、あわやという所で夢から醒め、人間として正気に戻った（出眠幻覚）のであり、その恐怖を語っても、人々はただ感心したり、不思議だったり、興味悪がったりするだけであった。人間の側から見れば

師が物がたりにつきて思ふに、其の度ごとに魚の口の動くを見れど、更に声を出す事なし。かかる事まのあたりに見しこそいと不思議なれ

と奇怪に映ったであろう。

興義が三日間も仮死していた間に、興義の霊は肉体を離れ、鯉魚に憑依したことになり、夢から醒めた時に仮死した肉体に霊が戻って人間として言葉を取り戻すことができたのである。秋成は神も動物も同じ天稟を持った存在であるとの考えを持っているから、興義が魚に変身すもことは、霊そのものに変化したものであり、興義は善悪邪正を超し、神や魚と同じ性質を持って、魚の世界から人間の世界へと行き来できたのである。

巻三の「仏法僧」は中国白話物語の『剪燈新話』を原典として翻案されたものである。仏教の聖地とされている高野山をその舞台として選び、そこから物語を展開している。夢然父子が高野山で一宿した燈籠堂は

小石だも掃ひし福田ながら、さすかにここは寺院遠く、陀羅尼鈴錫の音も聞えず。
木立は雲をしのぎて茂さび、道に界ふ水の音ほそぼそと清わたりて物がなしき。

というような所であって、静かな描写の中に水の音だけを際だたせて後の場面で繰り広げられる恐ろしげな幻妖性を暗示した書き出しである。

折から「佛法佛法」と鳴く鳥の声を聞いて、これが弘法大師の詩掲にある鳥かとありかたくも不思議な鳴き声と聞いたのであろう。

寒林独坐草堂暁 三法之声聞一鳥
一鳥有声人有心 性心雲水供了々

これに応じて夢然の心の、今、感じている聖域としての高野山の恐れ、寂しさを夢然の筆を借りて秋成は

鳥の音も 秘密の山の 茂みかな

と詠んでいる。

高野山は霊場として亡霊の鎮魂する場所であるはずであるにもかかわらず、秘密の山の茂みとの挑発、秀次一行の亡霊が修羅となって出現してしまった。夢うつつのまま、堂の端にうずくまっていると、亡霊として現れた秀次一行は、口々に何か言いながら、酒宴を開きはじめた。それは部外者として恐ろしがって見ている夢然父子には恐怖としてしか映ってこない（注 18）。

亡霊一行の中の法師により脇句がつけられ

芥子たき 明すみじか 夜の牀

物語ではそれによってようやく秀次の心が和んだという（注 19）。

前句の秘密の山を調伏し、高野山が聖地であることを説いている。

秘密を知られたと知った秀次にあやうく修羅（人間が死んでも常に戦い続けていく彼の世の空間）の世界に連れ去られようとしたが、寿命がまだ残っていると諫められていて、秀次は連れ去ることをあきらめた。あまりの恐ろしさに気を失って死んだようになっていた夢然が、朝方の露の冷たさで気が付き、恐れおののき、法師大師の御名を唱えて下山したが、その後、体を悪くして保養したほどであった。

死霊が鬼と化し、生者を拉致しようとした恐怖がまざまざと思い起こされ、秀次がこの世で犯した数々の悪逆非道がものすごい印象となって後々になってもおそろしさがよみがえってくる。後日に通った三条の橋近くの瑞泉寺にある悪逆塚は、白昼でも恐ろしく、あの夜の秀次の印象と重なって思い出されるのである。

高野山は亡霊の鎮魂のための土地であるはずが、秀次の自殺により血ぬられた場所となってしまうことを物語っている。

『雨月物語』中、もっとも怪異性の高い物語として「吉備津の釜」を挙げることができる。「吉備津の釜」は、中国白話小説の『牡丹燈籠』をその原典として、秋成の豊富な知識

の中で情熱や人生の経験を生かして幻や怪異を描き出している。

吉備津地方に古くから伝わる神話に「吉備津彦の鬼退治」という話が残っている。それによると、垂仁天皇（360年頃）か崇神天皇（350年頃）の御代に百済からやってきた鬼神の温羅という王子が、中央政府から派遣された大吉備津彦に射殺される話である。その首は、何年経っても大声を発して唸り響いて止まない。そこで吉備津官の釜殿の釜戸の下に埋めた。けれどもなお十三年間、唸りは止まず近郷に鳴り響いたという（注20）。これは一種の宗教的な伝説であり、それよりこの御釜殿を祀ることによって悪霊の鎮魂を祈ったというのが物語の粗筋である。それが後に釜の中の水の沸き上がる音によって吉凶を占なった。これが後世の御釜祓いの神事となったのである。その神事の言い伝えを原点として、その信仰に基づいて物語は進行する。

吉備津神社の神主の香央造酒の娘の磯良と、奸たる性の持ち主の豪農の息子正太郎との結婚する際に行った釜占いが、

只秋の虫の叢にすだくばかりの声もなし

と凶兆を示したにもかかわらず、結婚してしまった事を不幸な予感として記し、この物語の怪異、幻妖な作意の下地を投げかけている。

釜占いが凶と出たのに結婚したことは、古代よりの信仰に反したことであり、由緒正しい神主の女として正しい古代よりの血を受けた貞節な清らかな妻が、奸たる性を持った夫のために度重なる裏切りに合い、そのためについに磯良は怨み、嘆きの毎日を通し、瀕死の状態に陥ってしまう。一方正太郎と共に逃げた女、袖の身の上にも暗い影がただよい始めた。「吉備津の釜」の本文中に

風のころと云いしが、何となく悩み出でて、もののけのやふに狂はしげなれば、ここに来りて幾日もあらず、此の禍に係る悲しさに、みづからも食さへわすれて抱き扶くれども、只音をのみ泣きて、胸窮り堪がたげに、さむれば常にかはるともなし。「窮鬼といふものにや。古郷に捨し人のもしや」と独むね苦し。（中略）見る見る露ばかりのしるしもなく、七日にして空しくなりぬ。

と述べ、暗に磯良の生霊の鬼化したことをほのめかしている。しかしここでは、磯良の生

死のことは書かれていないので、この物語の陰となって、何かしらの不安と恐怖感を正太郎のみならず、読者にも与えている。

袖をほうむった塚を訪れて、そこに並んでほうむられている新しい塚を見る。その塚に詣でている女性にいざなわれて行った先の館に磯良がいるのを見て、びっくりして気を失ってしまう。のちほど気が付くと立派な館にいたと思っていたのに、荒野の中の三昧堂であった。正太郎はそこで初めて磯良の怨霊が自分を誘引してきて、復讐を企だてたと分かったのである（注 21）。

正太郎は恐ろしくなり、陰陽師の所に占い判断を頼みに行き、災いが近くに及ぶと占われて、祈祷もしたり、朱書の護符を家中、門口にまで貼って身を守っていたが、四十二日の間、夜毎に恐ろしげな声で、

「あな悪や、ここにたふとき符文を設けつるよ、あな悪や、ここにも貼つるよ」と云ふ声、深き夜にはいとど凄じく、髪も生毛ことごとく、聳ちてしばらくは死に人りたり。

と強烈な恐怖を与えられた正太郎の追い詰められた有り様が書かれている。

かの鬼も夜毎に家を饒り、或いは屋の棟に叫びて、忿れる声夜ましにすぎまし。

このようにして四十二日も過ぎ、いよいよ空も明けわたったので、長い悪夢から醒めたように彦六に言葉をかけ、戸を引き明けた途端に、「あー」という叫び声と共にその姿は、どこにも見当たらず、ただ軒先にもとどりだけが掛かっていた。ここの記述は『雨月物語』の中でももっとも凄惨な描かれ方をしているので、原文を記しておく。

月は中空ながら影朧々として風冷やかに、さて正太郎が戸は明けはなして其の人は見えず。（中略）「いかになりつるや」と、あるいは異しみ、或は恐る恐る、ともし火を挑げてここかしこを見廻るに、明けたる戸厭の壁に腥々しき血濯ぎ流れて地につたふ。されど屍も骨も見えず。月あがりに見れば、軒の端にもものあり。ともし火を捧げて照し見るに、男の髻ばかりかかりて、外には露ばかりのものもなし。浅ましくもおそろしさは筆につくすべうもあらずなん。夜も明けてちかき野山を探しもとむれども、つひに其の跡さへなくてやみぬ。

と書いている。その姿が突然、消えてしまったことは、姿が見えないだけに、残忍な光景が思い浮かべられて恐ろしさが一しお強く感じられる物語である。

巻四に収められている「蛇性の姪」は中国白話物語の『西湖佳話』の「雷峯怪蹟」や『警世通話』の「白娘子永鎮雷峯塔」からの典拠であると言われている。この物語も現実と夢幻幻想をないまぜにした悲しい物語である。

主人公の豊雄は生長優しく、常に都風たる事を好んで、過活心なかりけりと云う素直なやさしい心の清らかな性格の持ち主であった。学問は教養として神宮の許に通って勉学に励んでいた。ある日の事、海は和いで波一つ立たないのに、急に雲が出て小雨が降り出してきた。そこの描写として

けふはことになごりなく和たる海の東南の雲を生して、
小雨そぼふり来る（注22）

雨は常として『雨月物語』の中では、怪異・幻妖の前提を暗示して、そこに美しい女性を配して文を構成している。

心清く真き心を持った豊雄は年は女にたらぬ女の、顔容髪のかかりいと艶ひやかに、
遠山ずりの色よき衣着て

と現れた美しい女性に心うばわれ、夢見心地となった。折からの雨であったので、師から借りた傘を貸してあげ家に帰ったが、その面影がわすれられず、ようやく寝付いた明け方の夢で昼の女性が出て来ていろいろもてなされ歓待されたので、酔い心も手伝ってついに一夜を共にす、と思った途端に夢が醒めた。

昨朝、昨日聞いた場所に尋ねて行くと、そこには夢に見た通りの露違わぬ造りの屋敷があり、真名児も出迎えに出てきて、酒や果物でもてなされ、ついに結ばれて枕を共にしたと語っている。

最初の出会いで、夢の中での体験した事と、今度は現実的に同じような体験をしたと言うことは、その曖昧さで現実と夢のさかい目が不明になってきて、後から出て来る数々の幻妖さを思わせる書き方になっている。姪とはエロスの事であり、この物語はエロスに念まれる魔性、異類性（幻想性）を蛇性として形象したものである（注23）。

二人はいろいろな語らいの末、盗品とも知らず豊雄は真名児の差出すきらきら光る太刀を手にして家に帰って行った。

家の人にあやしまれて役人に捕まえられ、身の潔白を示すために役人と共に真名児の家へ行くと、そこは誰も住まない廃屋となっていて、沢山の盗品がそこにあった。

前栽広く造りなしたり。池は水あせて水草も皆枯、野ら藪生かたふきたるに、大きな松の吹き倒れたるぞ物すさまじ。客殿の格子戸をひらけば、腥き風のさと吹きおくりきたるに恐れまどひて、人々後にしりぞく。豊雄只声を呑みて歎きゐる

その様子は、幻妖・怪異の出現する前兆のようにおどろおどろと恐ろしげに表現している。

屋敷は人が住んだ様子もなく荒れはて、塵は一寸ばかり積りたり。鼠の糞ひりりちらしたる中に、古き帳を立てて、花の如くなる女ひとりぞ座る。近く進みて捕ふとせしに、忽地も裂るばかりの霹靂鳴響くに、許多の人逃る間もなくそこに倒る。然見るに、女はいづち行きけん見えずなりにけり。

豊雄はショックをかくしきれず、体調を悪くして、大和にいる姉夫婦の所へ保養に出掛けるが、御明燃心の商いをしている姉の店へ買い物客として真女兒が現れた。真女兒は自分の誤解を解くために

我もし怪しき物ならば、此の人繁きわたりさえあるに、かうのどかなる昼をいかにせん、衣に縫目あり。日にむかへば影あり。此の正しきことわりを思しわけて、御疑ひを解せ玉へ

と豊雄に訴えた。

儼正しく人ならぬは。…… まことに鬼の住むべき宿に一人居るを、人々ら捕へんとすれば、忽ち青天霹靂を震ふて、跡なくかき消ぬるをまのあたり見つるに、又逐来りて何をかなす。すみやかに去れ

というが、真名児の涙ながらの言い訳を聞いて、疑いつつも、真名児の追いつがる心に絆されてみやび風な心に戻っていく。この時点では真名児が蛇性であり、現世の女性に変身しているということは、まだ豊雄は疑いつつも気が付いていない。

三月になって吉野山の春を楽しみに出掛けた。その道すがら

岩がねづたいに来る人あり、……此の滝の下にあゆみ来る。人々を見てあやしげにまもりたるに、真名見もまるやも此の人を脊に見ぬふりなるを、翁渠二人をよくまもりて、「あやし。此の邪神など人をまどわす。翁がまのあたりをかくても有るや」とつぶやくを聞きて、此の二人忽ち躍りたちて、滝に飛び入ると見しが、水は大虚に湧きあがりて見えずなるほどに、雲摺墨をうちこぼしたる如く、雨篠を乱してふり来る。

翁にさとされ、その忠告により生来のみやび風からますらお心に目覚めた豊雄は、父母や兄の家に帰り、結婚することになり婿として迎えられた富子の美しさに、又みやび心が出てきた。豊雄の心の変化で蛇性にかえった真名児が又しても出現し、富子に憑依して、恨み言を言って、妖蛇の本性を現わす。

海に誓ひ山に盟ひし事を速くわすれ玉ふとも、さるべき縁にしあれば又もあひ奉るものを、他し人のいふことをまことしくおぼして、強に遠ざけ玉はんには、恨み報ひなん。紀路の山々さばかり高くとも、君が血をもて峯より谷に灌ぎくたさん。あたら御身をいたづらになし果玉ひそ

と言ったので、豊雄は身のけもだち、恐ろしさに死んだようになって夜を明かした。

蛇性を調伏するために頼んだ僧もそれを果たせず、遂に死ぬことになる。そこで豊雄は考えて真名児と共にどこへでも行くから妻の富子は助けてくれと家を出る決心をする。結果としては妻の父の計らいで名僧のほまれ高い法海和尚の力を借りて鎮魂に成功するという物語である。

人間としての現実と異類（蛇性）の中にある幻妖との間でゆれ動いたであろう心の苦しみが伝わってくる。豊雄が大和の翁にさとされたようにますらお心に気づき、妻と周りの人の苦難をまぬがれるならばと、それと真名児の気持ちがそれで鎮まるならば、妖怪と知

りながら決心をした（注24）。

真名児にとってはその決心が嬉しく、それに引き換え、蛇性を封じ込めるために、力を貸した富子は命を落とし、真実真名児の心を受け止め、人間も異類も人を想う心は同じであると悟った豊雄は何事もなく生命永らえて、長くその心の中に真名児の想いが存在するのである。

巻五の「青頭巾」は篤学修養の深い経験が広く世に伝えられている阿闍梨が愛欲の迷路に入ってしまった、人肉食の鬼に化してしまった。その阿闍梨がたまたま立ち寄った高僧の快庵禅師によって証道歌を与えられて救済されたという物語である。

快庵禅師が

富田といふ里にて日、入りはてぬれば、大きな家の賑ははしげなるに立ちよりて、一宿をもとめ給うに田畑よりかへる男等、黄昏にこの僧の立てるを見て、大きに「怕れたるさまして、

「山の鬼こそ来りたれ。人みな出でよ」と呼びののじる（注25）。

とあり、『雨月物語』の妖怪の現われる一つの要素としての夜が設定されて書かれている。

さきに下等が御憎を見て鬼来りしとおそれしもさるいわれの侍るなり。ここに希有の物語の侍る。妖言ながら人にもつたへ給へがし。

と大きい家の主人が語るには、そのの里の上の山には立派な阿闍梨が住んでいたが、去年の春に水丁の戒師に迎えられて、越の国に百日ほど滞在された後に帰られたが、その時に越の国より十二、三歳になる容子の美しい童児を連れて来られて、とても可愛がっておられた。ところが、その童児がちょっとした病気かもとで死んでしまった。

ふところの壁をうばはれ、挿頭の花を嵐にさそはれしおもひ、泣くに涙なく、叫ぶに声なく、あまりに歎かせたまふままに、火に焼、土に葬る事をもせで、臉に臉をもたせ、手に手をとりにくみて日を経玉ふか、終に心神みだれ、生てありし日に違はず戯れつつも、其の肉の腐り爛る苔みて、肉を吸骨を嘗て、はた喫ひつくしぬ（注26）。

住職は、寺の人々が逃げ去って一人になった後は、鬼のようになって里に下りて来ては人を驚ろかしたり、

或は墓をあばきて脈々しき屍を喫ふありさま、実に鬼といふものを昔物がたりには聞きもしつれど、現にかくなり給ふを見て侍れ。

快庵禪師は、以前は人徳すぐれて、ごくたくましい性の持ち主であった寺の院主を

心放せは妖魔となり、収むる則は仏果を得る

として彼を教化して立ち直らせる事を考えた。山院に上って行った禪師はそこに

楼門は荊軸おいかかり、経閣もむなしく苔蒸しぬ。蜘蛛をむすびて諸仏を繋ぎ、燕子の糞、護摩の牀をうづみ方丈廊房すべて物すさまじく荒れはてぬ

の在様を見た。一夜の宿をたのむと院主は

かく野らなる所はよからぬ事もあなり。強いてとどめがたし、強てゆけともあらず、僧のところにまかせよ。

と眠蔵に入ってしまったので、一言も語らないので快庵禪師はかたわらに座った。

見る見る日は入り果てて宵闇の夜のいとくらきに、燈を点けざればまのあたりさえわかぬに、只潤水の音ぞちかく聞ゆ。

とここで幻妖怪異の出現する地下を想定して書き出しており、更に

夜更けて月の夜にあらたまりぬ。影玲瓏としていたらぬ隈もなし

あたりは月の光が隈なくさして、見えないところがないのに院主は、快庵禪師の前を鬼の

ようにたけり狂いながら、禪師を追い求めて何度も行き来するけれども、その姿を探り得ることができなくて、倒れてしまった。朝、昨夜と同じ場所にいる禪師を見て、絶望のため黙りこくり、鬼と化してしまった自分にはとても生き仏である禪師の肉は味わえないし、鬼畜のくらし眼では本当の仏を見ようにも見えないと深く頭を下げた。

そこで禪師は自分の紺染の頭巾を脱いで、院主にかぶせ、解脱のため、証道歌の

江月照 松風吹

永夜清宵何所為

の二句を授け、一年後に訪ねてくるまでにこの句のこころを解くことを命じて山を下りた。

一年経って灰庵禪師がまたここを訪れると蚊の鳴くような声がするので、よく見ると僧侶とも見えぬ髪ぼうぼうとした影のような院主が座っているのが見えた。いまだに妄念が消えないのかと思った快庵は、持っている禅杖で一喝して

「なにごとぞ」と言って頭をたたくと忽ち氷の朝日にあふがごとく消え失せて、かの青頭巾と骨のみぞ草葉にとどまりける

となり、快庵は院主の長年の妄念を消し、成仏させた事であると結んでいる。

三、結び

『雨月物語』がすぐれた怪異、幻妖小説となっている大きな理由の一つには、作者秋成が、身体は不自由であっても、精神に異常を来しているわけではなく、知覚も正しく働いているのに一日中、自分の意志とは違う方向に歩いてしまったりすることは、狐狸のいたずらであると、怪異形類の实在を信じていたことが挙げられる（注27）。

出生の秘密とその生い立ちから来る、自からの不幸な体験、幼くして味わった病魔と、その後遺症による宿命ともとれる何かが、或いは目に見えぬ他の力の存在があったと思われる（注28）。

『雨月物語』の各篇の物語を見ると、その底に思想的背景となるものは、仏教であり儒教であり、そして日本の国学の思想をも加味した純粋な知識が下地として網羅されているのが見える。そこで物語に遺る方ない言葉で書く、幻想や怪異の中に、当時の儒・仏、

学門の荒廢の批判も含めて、魔の世界（虚構）を描いたと思われる。

夢幻・怪異の世界が虚構なものであるとしながらも癩症病みの秋成は、現実からふと非現実なものへと入眠幻覚におちいる。と思えば、また現実の中へ出眠している。これらの癩性のわずらいから来る宿命的な身体コンプレックスは、終生の怪異的文学への要素となっている（注 29）。

生来の性は、直き心、やさしい心を持ち、知識豊かな所があつて、「心さえ収むれば、妖魔を転じて仏果を得る」ように、晩年の秋成の心は清々しく、心豊かであつたと思われるのである。

注

1. 鷺山樹心『秋成文学の思想』 法蔵館 1979年 27頁参照
2. 森山重雄『幻妖の文学上田秋成』 三一書房 1982年 292～293頁参照
3. 中村幸彦『日本古典文学 56 上田秋成集』 岩波文庫 1963年 305頁参照
4. 中村幸彦『日本古典文学 56 上田秋成集』 岩波文庫 1963年 378頁参照
5. 郡司正勝『別冊現代詩手帖 秋成の怪異』 思潮社 1972年 120頁参照
6. 郡司正勝『別冊現代詩手帖 秋成の怪異』 思潮社 1972年 121頁参照
7. 中村幸彦『日本古典文学 56 上田秋成集』 1963年 285頁 51 参照
8. 中村幸彦『日本古典文学 56 上田秋成集』 1963年 260頁 16 参照
9. 中村幸彦『日本古典文学 56 上田秋成集』 1963年 269頁 28 参照
10. 中村幸彦『日本古典文学 56 上田秋成集』 1963年 270頁 29 参照
11. 大場俊助『上田秋成研究』 島津書房 1993年 166～167頁参照
12. 森山重雄『幻妖の文学上田秋成』 三一書房 1982年 316頁参照
13. 元田興市『雨月物語探求』 翰林書房 1995年 13頁参照
14. 森山重雄『幻妖の文学上田秋成』 三一書房 1982年 20頁参照
15. 森山重雄『幻妖の文学上田秋成』 三一書房 1982年 21頁参照
16. 青木正次『雨月物語上巻』 「浅茅が宿」 講談社 1996年 187頁参照
17. 森山重雄『幻妖の文学上田秋成』 三一書房社 1982年 40頁参照
18. 森山重雄『幻妖の文学上田秋成』 三一書房社 1982年 52頁参照
19. 青木正次『雨月物語上巻』 「吉備津の釜」 講談社 1996年 273頁参照
20. 森山重雄『幻妖の文学上田秋成』 三一書房社 1982年 53頁参照
21. 森山重雄『幻妖の文学上田秋成』 三一書房社 1982年 57頁参照

22. 青木正次『雨月物語下巻』「蛇性の姪」講談社 1996年 16頁参照
23. 森山重雄『幻妖の文学上田秋成』 三一書房社 1982年 65頁参照
24. 中村博保『上田秋成の研究』ペリかん社 1999年 366頁参照
25. 青木正次『雨月物語下巻』講談社 1996年 157頁参照
26. 青木正次『雨月物語下巻』講談社 1996年 166頁参照
27. 中村博保『上田秋成の研究』ペリかん社 1999年 324頁参照
28. 鷺山樹心『秋成文学の思想』 法蔵館 1979年 30頁参照
29. 国文学 解釈と鑑賞 七月号 ロマンの病理 至文堂 1976年 95頁参照

参考文献

- 元田與市『雨月物語探求』翰林書房 1995年
- 森山重雄『幻妖の文学上田秋成』 三一書房社 1982年
- 中村博保『上田秋成の研究』ペリかん社 1999年
- 森田喜郎『上田秋成小説の研究』 和泉書院 1991年
- 『別冊現代詩手帖』思潮社 1972年
- 大場俊助『上田秋成研究』 島津書房 1993年
- 重友博士論文集『日本文学の研究』文理書院 1972年
- 青木正次『雨月物語上・下』 講談社 1996年
- 中村幸彦校注『上田秋成集』 日本古典文学大系 56 岩波文庫 1963年
- 鷺山樹心『秋成文学の思想』 法蔵館 1979年
- 国文学『解釈と鑑賞』昭和五十一年七月号上田秋成幻想の方法 至文堂 1976年
- 国文学『上田秋成一ゴーストと命録の物語』古典の中のゴーストたち六月号
学燈社 1995年
- 日本文学研究資料刊行会編『秋成』 有精堂 1972年
- 浅野三平『雨月物語・癩癩談』 新潮社 1979年
- 岩崎小弥太『上田秋成』 有精堂 1975年
- 野口武彦『秋成幻戯』 青土社 1989年
- 萱沼紀子『秋成文学の世界』 笠間書房 1979年
- 市毛勝雄『雨月物語』講談社 1981年
- 麻生磯次『江戸小説概論』 山田書院 1976年
- 解釈と鑑賞 上田秋成とその時代 至文堂 1976年